新潟県
（昭和33年3月18日　第3種郵便物認可）

公民館月報

KOMINKAN GEPPO

2009
4
April

特集　住民の心をつなぐ情報紙

4.5
2 **トピックス**　「実践事例集」刊行
3 **視点**　啐啄同時
3 **ひろば**　季節はめぐる、自然の営みの中で
6 **実践記録シリーズ**　地区コミュニティ協議会との連携事業「濁川地区コミュニティＡＲＴ」
7 **サークル交流**　春を告げる笛太鼓・獅子の舞（糸魚川市）／造形の美しさに魅せられて（津南町）
7 **素顔拝見**　齋藤　隆広さん（新発田市）／徳永　知己さん（長岡市）

「粟島キッズ教室　流木クラフト」
粟島浦村

表紙解説
流木を加工した工作教室の様子。
キッズ教室では、このように地域の資源を活かした体験活動を実施しています。

No.674

TOPICS

「実践事例集」刊行

新潟県の公民館事業・講座実践事例の紹介

新潟県公民館連合会では、平成20年度全公連の「資料発行推進事業」の助成を受け実践事例集を発行しました。

新潟県内の公民館事業及び講座等の実践事例を紹介することにより、今後の事業・講座内容の充実、活性化の参考資料にしたいという目的です。

新潟県公民館月報の編集委員を中心に、掲載する事業の内容や種類等について検討を重ねました。三回の編集会議を経て、上記の内容の構成でまとまり、発刊に至りました。

ページ数の制約等により、今回紹介できた実践例はごく一部です。今後、県内の情報収集に努め、公民館月報をとおして特徴のある実践や先進的な実践等を紹介していかなければならないと考えます。

県内各公民館では、地域住民や関連する部署等と連携するなど、様々な工夫をしながら特徴のある事業等の企画・運営に取り組んでいます。同じような事業であっても、公民館によってその準備や開催、評価等に独特のノウハウがあるのではないでしょうか。

この度発行した「実践事例集」が、公民館同士の情報交換の場になるとともに、今後の事業・講座内容の充実、活性化につながる有効な資料になればと願っています。机上に置き、時々開いていただきご活用ください。

平成20年度

実践事例集

新潟県の公民館事業・講座実践事例の紹介

新潟県公民館連合会では、「実践事例集」を発刊しました。

平成19年度から20年度までの新潟県公民館月報掲載の「特集」「実践記録シリーズ」をベースに、現在取り組んでいる最新の実践等も取り上げ掲載しています。

新潟県内19市町村と県立生涯学習推進センターの実践を、次のように8分野29の事例で構成し紹介しています。

〈内　容〉

1　子育て支援事業（５例）
2　青少年体験事業（７例）
3　地域づくり事業（４例）
4　世代間交流・団塊世代対応事業（４例）
5　健康・環境対応事業（２例）
6　人材育成事業（２例）
7　その他の事業（３例）
8　文部科学省委託事業（２例）
○　社会教育法一部改正に関する資料

県内の公民館や関係機関が取り組んだ事業に加えて、各市町村内の関係各課と連携して取り組んだ事業や、事業の計画立案・評価の事例等についても掲載されており、充実した内容です。

今後の事業・講座等の充実、活性化の参考資料としてご活用ください。

◇　Ａ４判　　全126ページ　　頒布価格900円＋送料実費

〈実践事例集についての問合せ先〉
新潟県公民館連合会
〒 951-8053
新潟市中央区川端町２丁目９番地
新潟県林業会館内
電話・ＦＡＸ　025－224－6073
E-mail　ni-koren@juno.ocn.ne.jp

BOOKS INFORMATION

自主財源確立のためには

「新潟県公民館月報」の自主購読推奨

公民館月報（個人購読大歓迎）　定価１部150円　〒共・年極　1,800円

申込先　〒951-8053　新潟市中央区川端町2-9　県林業会館内　県公民館連合会事務局　TEL・FAX025-224-6073

視点

啐啄同時（そったくどうじ）

糸魚川市上南（じょうなん）地区公民館長　伊藤　幸雄

「うちじゃ勉強は教えられんし、塾までは遠い。誰か勉強教えてやってくれんかねー。」

よしよし、村には高専卒や元教員のお母さんがおるぞー。

週二回、公民館の小学生勉強会は地域の親・子に喜ばれ五年目を迎える。

村の裏山にミニゴルフ場ができて爺さん達が「オラもいっぺんやってみたいもんだ。誰か教えてくれる者はおらんもんかねー。」

よしよし、俺の趣味はゴルフだ、手ほどきしよう。

廃校体育館でプラスチックボールを打って二年。裏山ゴルフ場での第一回館長杯コンペは、三十二名の爺さん婆さんで華やいだ。

「糸魚川市生まれのスポレック競技が今年の国体デモスポでやるそうだねー、どんなスポーツだね。やってみたいもんだ」

よしよし、俺はかじったことがあるぞー。

夜の小学校体育館三面のコートでは親子二十四名、大はしゃぎの一時間半となっている。

HOT NEWS 掲示板

平成20年度 第３回編集委員会開催

平成21年1月29日(木)
於：新潟市生涯学習センター
304講座室

◇　開　会

1　実践事例集の編集について

(1)原稿の確認（過不足、ページ数、内容等）

※全部確認済み。

※各ページの文字の大きさ、文字数・行数等をできるだけ統一し、読みやすくすることから、当初予定の80ページよりも増える。

(2)原稿の分野別の分類（その他の分野の名称等）

※当初の６分野に、「健康・環境」「人材育成」を加えて８分野にする。

※一部改正された社会教育法の解説については、全公連の了承を得て月刊公民館の記事を使用する。

(3)その他（表紙写真、色調等）

2　新潟県公民館月報平成21年４月号～９月号の「特集」テーマについて

※上越、中越、下越、新潟市の中で、先進的な取組を紹介する。

※４月から９月までのテーマについて決定した。

3　その他

※年度内の編集会議は行わない。

◇　閉　会

ひろば

季節はめぐる、自然の営みの中で

小千谷市社会教育委員・公民館運営審議会委員　藤巻るい子

根開きという言葉をご存知だろうか。春先の山中でよく見られる現象で、ブナの根元の雪解けをいうらしい。白く広い山の斜面に無数に点在する黒い土のえくぼ。木々の地下に秘むエネルギーが、春を感知して熱となって放出され、根元の雪を解かす。あぁ、春先の山の圧巻だ。

その漲る目覚めの躍動に、太古から受けつがれた私のＤＮＡも等しく共鳴し何やら血が騒ぐはずだったのに、今年はちょっと拍子抜け。異常気象といっていいのか、このまま春かと油断する頃に思わぬドカ雪、そしてあっと言う間の雪解け、今また淡雪が掃くように。野山は既にはだれ雪状態だ。山のエクボなんぞと感傷するヒマもない。長い冬の間のこもった息をすっきり吐き出すタイミングをはずして戸惑いを覚えている。そんな私の思いなど何処吹く風、季節は確実に春を迎え、初音やら花便りやらがやがて届く。

自然の営みの変化に理由づけはいらない。無理な流れへの逆らいは、私達も含め淘汰される。自然の流れに静かに乗る、そんな日々でありたい。

つなぐ情報紙

民館報を担当して～

工夫、情報等、その委員の立場での考えや意見を自由に発言するものだから、毎月いろんな面で発見や勉強になる。

5　現在の公民館報の内容について

1面は主として

①「特集記事」トップ記事

②「ちょこっと一言」地域住民の短い随筆（350字以内。現在まで252名が寄稿）

③「トピックス的な話題」

2面は主として

①「地域の明るい話題の紹介」トップ記事

②シリーズ「今、子どもたちは」地元の保育園、幼稚園、小中高の学校などによるローテーションで子ども達の様子を紹介

③美術コンテスト受賞者とその作品を写真で紹介

④スポーツ等、各種大会の結果紹介

⑤「文芸欄」地元文芸グループ（俳句・短歌・川柳）の作品紹介

※小須戸地区は狭い地域ではあるが、新しいニュース、埋もれていた文化や歴史等、取材には事欠かない。毎月、A3サイズのタブロイド版の裏表は、身近な地域の情報や話題で盛りだくさんです。

6　担当者のこだわり

次のようなこだわりを持って、毎月公民館報を編集している。

①誰でも気軽に読める内容

②小須戸らしさを出す（ご想像にお任せします）

③紙面での登場人物を増やしていきたい

④地域の明るい話題や知らせたい情報に常にアンテナを張っていたい

⑤住民の立場や目線に立ちたい

⑥担当者自身が興味を持ち意欲的に取り組める話題を記事にしたい（担当者が、おもしろいと思わずして、読者が魅力ある記事として読むだろうか）

⑦公民館報に関わった人との出会いを大切にしたい

※公民館報をとおして人と人とのつながりが出来る。公民館報は地域の人々の「コミュニケーションの潤滑剤」である。それを目指して、今後も頑張っていきたいものだ。

7　担当者が感じる不安・問題点

毎月、公民館報を発行しながらも、時々重くもたれかかってくる不安や問題点を書き出してみた。

①もっと住民からの紙面に対する反応が欲しい（批判も含めて）

②身近な話題や情報を提供してもらい、もっと公民館報づくりに住民から関わってもらいたい

③投稿記事を募集しても集まらない

④厳しい予算編成等による公民館報の存続の危うさ

8　終わりに

公民館報は時代を映す鏡としてその地域の様子や行事、暮らしぶり、住民の生の声等を紹介してきたと思う。

それが現在、公民館報を発行している公民館は県内でもごく僅かだと聞きます。今後、他の公民館でも公民館報の復活が少しずつでも広がりをみせてくれれば嬉しい限りです。

特集

住民の心を

～小須戸地区公

編集委員の皆さんと担当者

新潟市小須戸地区公民館
主事　野崎　義和

1　うらやましがられた仕事

「見えないものが見えてくる仕事に関われていていいねえ。」と、私が公民館報の業務に携わっていることに対して、５年位前に飲み会の席で同じ公民館報の編集委員の１人に言われた言葉が印象に残っています。

正直、その時はその言葉のもつ意味がわからなかったが、足掛け８年間も公民館報づくりに携わってきて、その言葉の意味が少しずつわかってきた。

地元の文化や伝統行事、新しい風等を掘り起こし住民に知ってもらうことで、今までよりも郷土愛を感じ、活性化しようとする気持ちが高まっている。そんな中で公民館報の果たす役割は今後、益々大きいのではないだろうか。

2　明るい話題を求め、いざ出動！！

地域の住民に知らせたい情報をつかめばカメラと筆記用具を持ち、実際にその現場に駆けつけ自分の目で確かめ、現地の人にお話を伺いながら取材をさせて頂いている。

常日頃から公民館報の記事を計画的に集めようとは心がけているが、ニュースは生き物のように突然降って湧いたように起きることが多く、実際には現地の方とも事前交渉無しで、突然お話を伺うことの方が多い。それでも現地の住民の方々は「こんげとこまでよう来てくれた。公民館のことらすけ協力してやらねばだめらこてね」というような感じで初対面の方はもとより、みなさん、あたたかく取材に応じて下さる。だからこそ地域に密着した生き生きとした公民館報が出来るのではないだろうか。

3　59年間映し続けた地元の文化

旧小須戸町中央公民館が発行した「小須戸地区公民館」の第１号が世に出たのが昭和24年10月で、新潟県下第１号の公民館報といわれている。

資料によれば、その第１号に携わっていた間野良知氏（故人・４代目公民館長）は、「当時、小須戸は近隣地域の中でも群を抜いて文化活動が盛んな土地柄で、それが公民館報の創刊へとつながっていったんです。」と語っていられたそうである。

同紙は現在、651号、59年の歴史がある。その間、小須戸地区の文化と歴史を紡いできた。

4　編集作業の手順について

公民館報の編集手順は、毎月１回「館報編集会議」を開き、担当の公民館職員と地区内の有識者５名で構成されている。編集委員が集まって次号の編集内容を検討する。

主な編集会議の検討内容は

①公民館職員が用意した原稿のチェック
②来月（次）号に盛り込む記事の内容協議
③編集委員からの情報提供など
④前月号の公民館報の反省と評価
⑤雑談（笑いの中にヒントがあるのでは…）

この編集会議では、いろいろなアイデアや

実践記録シリーズ 133

地区コミュニティ協議会との連携事業「濁川地区コミュニティART」

新潟市北地区公民館長　佐藤　晴夫

開催日当日、ワークショップで賑わう会場風景

はじめに

平成19年度から新潟市の公民館では、各小学校区に結成された地域コミュニティ協議会との連携が公民館活動の大きなテーマとなりました。はじめてといっていい事業です。そこで19年度は、当館が地域コミュニティ協議会を所管している北区役所の政策企画課に呼びかけ、職員同士によるプロジェクトチームを結成し、地域コミュニティ協議会と公民館の連携の具体的な手立てを探ることにしました。そこから、平成20年度は公民館として事業を展開しました。それがこのたびご紹介する「濁川地区コミュニティＡＲＴ」です。

ワークショップで企画プランをつくる実行委員会メンバー

１．ＡＲＴを地域づくりに導入した理由

ＡＲＴが地域興しなどに導入されていく姿には歴史がありますが、意外なことに芸術家たちからのニーズが高いことです。それは日常生活から隔絶されがちな芸術作品を日常生活に持ち込み、ごく身近なところから表現行為を問い直し、あらためて社会との結びつきを深めたいということです。このことは、地域が今日の時代性や地域ニーズに応じた地域創造を図ろうとしたき、ＡＲＴの持つ創造力や想像力がその意図にうまく合致するからでしょう。理屈はともかく、予想もしない刺激を求め、若い世代をはじめとするいろいろな世代が参加できる地域づくりを目指しました。

２．地域に呼びかけて実行委員会を結成

連携相手は濁川地区コミュニティ協議会です。また、アートプランナーとして新潟大学教育学部の丹治嘉彦准教授とそのゼミ生に依頼しました。

さて、濁川地区は阿賀野川下流右岸の農村地帯であり、そこに大きな２つの新興住宅地があります。人口は8,000人ほどです。コミュニティＡＲＴを展開するにあたって、協議会の文教部員６人を主体に実行委員会を組織しました。一般の地域住民からも公募し、入会者は合計で30人。そこに大学のゼミ生が参加し、全体で40人ほどになりました。

とまとドームを組み立てる

３．「コミュニティＡＲＴ」の活動は白紙から

「濁川地区コミュニティＡＲＴ実行委員会」の活動は、まったくの白紙で事業を企画立案するところから始めました。実行委員会を６人構成５班に分け、ワークショップを６回展開しました。濁川地区の現状把握、そこからの事業テーマを探し、テーマに基づき企画プランづくりを実施しました。各班が競い議論し、これに大学サイドが参加したので、ガチンコバトルが展開していきました。「なぜＡＲＴなんだ」から、企画立案の選択、大学サイドの詳細プランにまで及びました。**最終的に決定したのが「とまと村」でした。**濁川地区の特産であるトマトをテーマに、濁川地区の旧住民と新住民（新興住宅地）のコミュニケーションを深めようという計画です。

開催日は11月２日(日)、会場を濁川中学校グラウンド。濁川中学校文化祭とジョイントし、約300人が参加して地区の交流を深めたものです。

おわりに

今回の事業は３年計画で進める予定です。今回はウォーミングアップとしました。当館のネライどおりといかない場面が多々ありました。しかし、若い世代をはじめ、地域の多くの皆さんが参加してくれたことが大収穫でした。

circle サークル交流

春を告げる 笛太鼓・獅子の舞

寺地かぐらサークル

「公民館から笛や太鼓の音が聞こえてくると春を感じるねエ」三月に入るとこんな声が地区のあちこちで聞かれます。

私たち『寺地かぐらサークル』は、地区の人や子どもたちに地元に伝わる神楽を楽しんでいただき、地区の良さや地区に伝わる伝統芸能を知ってほしいと願い、二十三年前に、それまで三十年間も途絶えていた『かぐら』を復活し、現在まで続けています。

若い頃、舞や笛・太鼓で地区を盛り上げた長老たちに教えを請い、練習を重ねて覚えた舞を四月の祭礼に披露し、地区内を一日かけて回ります。親・子・孫の三世代が一緒になって笛や太鼓に合わせ手拍子をとり、獅子の舞に戯れて楽しい一日が過ぎてゆきます。

（糸魚川市寺地地区公民館　倉又　雄二　記）

造形の美しさに魅せられて

折鶴の会

命のない一枚の紙を「折る」という作業で、紙の調べを聞くことができる折り紙。紙に魅せられた仲間が集まり、折り紙の会のサークルが発足しました。今年で三年目の春を迎えます。小学一年生から高校生、そして八十五歳の高齢のおばあちゃんというメンバー構成です。

造形の世界では、ものによっては、作品を完成させた時、達成感は格別なものがあると同時に、その作品に対する嫌悪感を味わうことがありますが、折り紙は違います。折り紙は、丁寧にきちんと折ることで、達成感を味わい、同時に喜びと楽しさ、そして、感動が一気に訪れます。

最近は、紙の質感に似合った作品を折ったり、模様合わせで予想以上の柄を誕生させたりと、感動の幅が広がってきます。

昨年は、町の美術展にも参加しました。今年は、大きいオブジェに挑戦したいと意気込んでいます。

静寂の一時に癒されながら、造形の美しさに魅せられています。

一ヶ月に二回、第二週と四週の金曜日を心待ちにしている十九人のメンバーです。

（津南町・折鶴の会　河田サキ子　記）

素顔拝見

長岡市中之島公民館　主事　徳永　知己さん

徳永さんは、長岡市中之島公民館に配属になって２年目であり、持ち前のパワーで次々と仕事をこなしています。特に、趣味はエレキギターの演奏とかなりロック系音楽を好んでいるようです。

公民館の仕事がら、休日や夕方の仕事が多くてかなり体力がいるのですが、８月の暑い中、小学生を対象にした野外炊飯など自然体験事業の「なかのしま元気塾」でも大活躍し、美味しいカレー作りに子ども達と奮闘していました。誰にでも親切でやさしい彼ですが、この顔写真をみてビビビ！ときた方は是非、中之島公民館までおいで下さるようお待ちしています。

これからも、元気で地域づくりに取り組んでいる彼をみなさんも応援してください。

（長岡市中之島公民館　総括主査　内藤 智 記）

新発田市加治川地区公民館　主事　齋藤　隆広さん

「おはようございま～す。」からはじまり「帰りま～す。」と一風かわった発音であいさつをする、我が地区公民館の若きホープ齋藤君を紹介します。

４月に、水道局から異動してきた齋藤君は、加治川地区体育協会事務局の仕事を全般にやっております。

体協で開催した、卓球教室　エクササイズ教室では、おばちゃまたちに大人気で、子・孫以上に参加者から可愛いがられています。

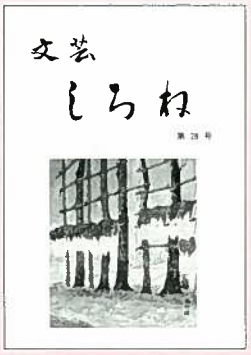
新人の頃は、行動が自由人・天真爛漫で「おにぎり君」と呼ばれていたようですが、今は「齋藤君」と公民館では呼んでいます。

もうすぐ異動して１年がたちますが、若者らしいすばやい行動を期待しています。

（新発田市加治川地区公民館　主任　柳川　記）

恵贈資料紹介

白根文化協会 白根地区公民館 文芸しろね 第28号



白根地区公民館から、「文芸しろね」第28号を贈っていただきました。年一回の発行を積み重ね、今回で28号になります。

「文芸しろね」には、白根・味方・月潟地区の方々や、新潟市南区にゆかりのある市外・県外の方々、地元白根高校の生徒などからの投稿があるということです。

今年度は、七部門に百三十名の方々から、五百六十点の作品の投稿がありました。

表紙題字と表紙絵は、第二回南区美術展覧会の書道、日本画部門の最優秀賞受賞者の作品で構成されています。

内容を目次で紹介します。

随筆（十二名・十二編）
コント（一名・一編）
小説（四名・四編）
詩（七名・七編）
短歌（三五名・一三五編）
俳句（六六名・三〇一句）
川柳（二〇名・一〇〇句）
挿し絵（八名・二四点）

各部門の最後に、編集委員の感想等が「寸感」として掲載されています。日常生活の中の、様々な出来事や社会の動静などを、時には鋭く、また、やさしくとらえ、自分の思いを丁寧に表現されている作品を楽しく読ませていただきました。

担当の方にお聞きすると、投稿数にあまり変化はないが、毎年続けて投稿してくださる方も多いということでした。一方、なかなか新しい方が入ってこないという現状もあるようです。

今年度、県公連に恵贈いただきました文芸誌を何冊か紹介してきました。各地域の長年にわたる文芸活動を、さらに発展・継続し、地域の宝として育てていく活動の広がりを期待したいと思います。

A5判　全191ページ　残部あり。

「文芸しろね」問合せ先
新潟市白根地区公民館
〒950-1477
新潟市南区田中383番地
☎025-372-5533

あとがき

相澤健蔵事務局長が、新潟市教委生徒指導主事に登用されたため、急きょ再登板、事務局長職を代行することとなりました。

一年のブランクがあり、感覚を取り戻すのに時間がかかりそうですが、何とか努力していきたいと思いますので、何分よろしくお願い申し上げます。

（鈴木友夫　記）

美しい国土と豊かな環境を未来の世代に

過疎地域は、我が国の豊かな自然や歴史・文化を有するふるさとであり、国民共通の財産です。
この大切な地域を未来の世代に引き継ぐため、平成22年3月末をもって失効する現行の「過疎地域自立促進特別措置法」に替わる新たな法律の制定が必要です。

新潟県過疎地域自立促進協議会
会長（出雲崎町長）　小　林　則　幸

新潟市中央区新光町4-1　新潟県自治会館内
TEL 025(285)0041　FAX 025(285)1609

◆新潟県内の過疎市町村（15市町村）
長岡市、上越市、柏崎市、十日町市、村上市、糸魚川市、妙高市、佐渡市、魚沼市、阿賀町、出雲崎町、川口町、津南町、関川村、粟島浦村

発行所　新潟県公民館連合会　発行人／会長　韮沢　豊　編集人／事務局長代理　鈴木友夫　Eメール/ni-koren@juno.ocn.ne.jp
〒951-8053 新潟市中央区川端町2-9 県林業会館内　TEL・FAX(025)224-6073
印刷／第一印刷所　〒950-8724 新潟市中央区和合町2-4-18 TEL(025)285-7161 FAX(025)282-1776 【定価1部150円 〒共・年極 1,800円】